

〔「白描の美」展によせて(2)〕

岡田為恭筆「納涼図」に見る白描物語絵の展開

「白描」とは、墨の線を主体とした絵画表現をさします。特に日本の物語絵では、長く白描の手法が好まれ、様々な特色を持つ作品が生み出されました。本稿では、岡田為恭筆「納涼図」を取りあげつつ、考察されることが少ない江戸時代後期の作例に注目したいと思います。「納涼図」は季節行事を題材とした作品ですが、江戸時代後期の白描物語絵の展開を見る上で興味深い作品です。

岡田為恭(1823～1864)は、江戸時代後期に活躍した復古やまと絵派の代表的絵師の一人に挙げられます。漢画を基盤とする狩野家の出身でしたが、やまと絵に傾倒し、膨大な古画学習を通じてやまと絵の知識を積みました。岡田為恭筆「納涼図」(根津美術館蔵、図1・2)には、泉殿で涼む男性と童子、童女が描かれています。泉殿とは、寝殿造りの泉水に突き出した建物のことです。三人の衣装や髪型からも、王朝時代をイメージしていることが分かります。建物や人物の形状は、「春日権現験記絵」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵、図3)を参考としており、為恭の古画学習が反映されています。ただ、そのまの写しではありません。泉殿から水鳥を見て興じる三人中の烏帽子姿の男性に髭を加えて壮年の風貌にしたり、童子の手に団扇を加

えたりすることで、親子が寛いで涼を楽しむという画題に変化させています。また、「春日権現験記絵」は濃彩の作品ですが、「納涼図」は墨と金泥のみで描かれているのも大きな変更点です。細く流麗な墨線が主に用いられ、部分的に様々な濃さの淡墨や金泥を施し、着物の色の違いや陰影などを表現しています。

墨線を主としながらも淡墨や金泥を効果的に加えるこうした表現は、江戸時代の白描物語絵で磨かれてきました。その先駆けとなったのが江戸時代初期に活躍した土佐光則(1583～1638)です。光則は小さな色紙に描き込む細密な源氏物語絵を得意としており、濃彩の作例だけでなく、「白描源氏物語画帖」(フリーア美術館蔵)、「源氏物語図屏風(色紙貼交屏風)」(東京国立博物館蔵)などの白描の作例も残っています。室町時代の白描物語絵が辿々しい線で描かれるものが多いのに対し、光則作品は専門的な技術に裏づけされた精緻な描線によって物語の情景を細やかに表しています。唇だけでなく衣装や調度の一部にも淡い朱色を用い、雲を金泥で表すなど、優美なアクセントとして淡彩を取り込む点や、淡墨の面的使用が増加し、岩や樹木などに淡墨を柔らかく重ねる点なども光則

の白描物語絵の大きな特色です。

江戸時代後期には、特に住吉派の絵師たちがこうした特色を積極的に引き継ぎ、掛幅の物語絵に應用しました。住吉広行の弟子である渡辺広輝(1778～1938)筆「源氏物語若紫・松風図」(ボストン美術館、図4)はその一例です。細い墨線で輪郭が象られ、金泥の霞がたなびいています。小さな色紙ではなく、縦が一メートル以上ある掛幅に描かれるため、様々な階調の淡墨を衣装や樹木に細やかに施して画面に変化をつけています。線の質や顔貌表現などは為恭作品と異なりますが、金泥や様々な階調の淡墨の効果的使用には相通じる要素を見ることができます。

為恭は物語絵ではなく、季節行事を題材としていますが、江戸時代後期には、白描物語絵で磨かれた手法が物語という画題を超えて展開していく傾向が見られます。江戸琳派の祖と言われる酒井抱一(1761～1828)は、古画の図様を基とした仏画に墨と金泥による手法を用いています。白描物語絵の大半が王朝物語を主題としていることや、白描の手法が平安時代まで遡るものことから、白描には古風で高雅なイメージが持たれていたのではないかと考えられます。江戸時代後期には、国学の隆盛や古画・古器の編纂事業の隆盛などと連動し、伝統的やまと絵への関心が高まっていました。そうした中、絵師たちの間で伝統的

やまと絵の手法の一つとして白描が再注目され、様々な工夫を加えて新しい魅力を持つ白描風の作品が生み出されていったのではないのでしょうか。浮世絵でも、天明から寛政年間(1781～1801)に、墨彩色と呼ばれる手法が流行しました。墨彩色とは、墨線でモチーフを細やかに描き表し、濃淡のある墨を主として補助的に金泥や黄などの淡彩を施したものです。酒井抱一も浮世絵を手がけていた二十代の頃に、墨彩色の「松風村雨図」(細見美術館蔵)を描いており、墨彩色の作品中最も古い天明五年(1785)の年紀が記されています。この作品に先行する可能性のあるのが、磯田湖龍齋(1735～1790?)筆「松風村雨図」(MOA美術館蔵、図5)です。墨彩色の浮世絵には当世風俗の美人を描いたものが多くありますが、初期の作例は主に謡曲『松風村雨』を題材としています。『松風村雨』は、須磨に流された平安貴族の在原行平に寵愛された海女の姉妹を巡る物語であり、月夜のシーンが印象的なため、白描の表現と結び付きやすい画題と言えます。墨彩色の「松風村雨図」の成功で、派手な彩色とは別種の美しさが見出され、浮世絵の他の画題にも広まった可能性が考えられます。

為恭の「納涼図」に話を戻しますと、この作品は、もとは十二月月の行事や自然の景物を描く六曲一雙の押絵貼屏風の右隻第六扇に貼られていました。各扇とも墨と金泥による描写で、行事の場合は王朝風俗で表されています。王朝風俗を描くにおいて、濃彩とはまた別に、墨と金泥による白描物語絵風の表現も相応しいものと為恭は考えていたのでしょう。為恭の墨線を主とする作品には「石雲清事」(個人蔵)など、動きのある伸びやかな線が特徴的な作品群もあります。ここにも、為恭における白描物語絵の伝統の理解と新しい活かし方を見ることができるのですが、この点については機会を改めて取りあげたいと思います。

(宮崎もも)

※図3は『ボストン美術館日本美術調査図録:第2次調査』(講談社、2003年)、図4は『続日本絵巻大成14』(中央公論社、1982年)、図5は『肉筆浮世絵大観4』(講談社、1997年)より複製致しました。

季刊 美のたより No.197

平成29年 1月 6日

発行 大和文華館

